

創立者とロシア

——通訳手記——

斎藤ベンツ・えく子

みなさん、こんにちは。斎藤ベンツ・えく子と申します。私は、5期生として創価大学文学部英文学科を卒業しました。母校でこのように講演の機会をいただき、大変に光栄です。私は、創立者池田大作先生が綴られたロシアとの友情の歴史に通訳としてお供させて頂きました。今日はその交流のお姿の一端を、通訳の目を通して感じたままにお話しさせていただきます。

創立者は、今からちょうど40年前、1974年に初めてソ連邦（現在のロシア）を訪問されました。その時私は高校3年生で、将来教師になりたいと思い受験勉強中でした。創立者の初訪ソについては、先輩や高等部の担当者からいろいろ教えて頂く中、創立者が通訳で御苦労されたと伺いました。同行されたのは当時の日本でロシア語通訳の第一人者と言われる方でしたが、哲学・仏教のバックグラウンドを持っておられず、創立者が大変気を遣われたとのことでした。伺ったお話ですので、事の真相は分かりません。ただそれを聞いた私は、単純に、それでは創立者がかわいそうにと思いました。多分そう思ったのは、私一人ではなくて、私と同じ期で入学した5期生の中には、そういう風に思った人が、たくさんいたようです。また、創立者がモスクワ大学で日本語を流暢に話すロシア人学生と交流をされ、「今後、創価大学でもロシア語を学ぶ学生を作っていきます」「将来は自分の通訳を連れて来ます」とおっしゃったとも聞いていました。創立者が本当にそうおっしゃたかどうかは定かではないのですが、創立者の言葉が嘘になってはいけないと思い、急遽進路を変更して、創価大学を受験しました。創価大学志願受付の最終日に申し込みに間にあったのが英文学科でした。受験の面接では「創価大学で何をしたいですか」と聞かれ、英文学科の教授に向かって「ロシア語を勉強したい」と回答しました。心の広い教授だったのでしょうか、「そうですね、君はもうロシア語は勉強しているのですか」と聞かれて、テレビロシア語講座で覚えたてのロシア語を話しました。「Ее нет дома. Его тоже нет дома」— 意味は、「彼女は家にいません。彼も家にいません」という、あまり場にそぐわないフレーズでした。「そうですね」とにこっとされたときは、「これで落ちたかな」と思いましたが、無事合格いたしました。

創価大学では、英文学科ですので当然のように毎日英語の授業がありました。ロシア語の勉強をするために入ったのですが、ロシア語は週一回の第2外国語の授業以外は自習でした。初めてのロシア語の授業の後に、「皆さんロシア語研究会を作りましょう、参加したい人は、ここに名前を書いてください」とノートを置きましたところ、32名が名前を連ねてくれました。おそらく、創立者がソ連を初訪問された翌年の入学生なので、ロシア語を受講した人は、創立者と共にソ連・ロシアへの想いを持っていたのだと思います。こんなにたくさん！と、胸膨らませて最初のロシ研の部会を開催したところ、実際に集まったのは7名でした。それ以来、このメンバーで、仲良くクラブ活動を開始しました。ロシア語は誰も教えてくれないので、ロシア語の歌を覚えては、渋谷のNHKに行きました。当時、NHKの外信部長をされていた酒井一之先生が、創価大学でロシア語を教えくださっていたのですが、なかなか授業以外で会えないので、私たちは1曲歌えるようになると、NHKに酒井外信部長を訪ねて、そこで歌を聞いてもらうという風変わった勉強会をしました。ロシア語上達の効率としては極めて低かったと思います。当時の創価大学は、中国語研究会が華々しく活動していました。どちらかというとロシア語は、ちょっと隠れている感じでした。特に中国のお客様が大学祭に来たときには、中研とロシ研が隣同士の教室だったので、奥にいるロシ研が目立たないように、私たちの教室の前に壁を立てられていました。そんな中、篠原学生部長（当時）がわたしたちにロビーで声をかけくれました。「ロシア語、上手になった？」と聞かれ、「はい、もうペラペラです」と思わず大風呂敷を広げてしまいました。そのおかげ(?)で、翌年の秋の大学祭では、ロシアからのお客様が来られ、篠原学生部長から「君たちが創立者の通訳をするように」といわれました。学生部長は、創立者から「ロシア語の出来る学生はいるの」と聞かれ、「ペラペラの学生がいます」と答えたのだそうです。学生に大きな信頼を寄せるのが創価大学の変わらぬ精神だとは思いますが、少し行き過ぎだった気がします。私ももう一人の男子学生、二人とも2年生でしたが、創立者から「通訳を頼みます」と言われ、無謀にも引き受けました。会見が始まり、創立者が「今日は難しい話は抜きにして、ゆっくり大学を散歩するような気持ちで語り合いましょう」とご挨拶され、私に通訳を促されました。私は無我夢中で、教科書の記憶を頼りに「Сегодня хорошая погода. Давайте вместе погулять.」（今日はいい天気です。一緒にお散歩をしましょう）と『通訳しました』。テーブルの向こうではお客様がにっこり。でも立ち上がって散歩に行かれことはなく、落ち着いて座ったまま頷かれたので、私は、「やった、通じたかも」と。創立者も、お客様以上に、満足そうに大きくうなずいてくださいました。ただ、そのすぐ後に、創立者は今度は北方領土の話をされました。「難しい話は抜きにして」といったのはどこに行ってしまったのか……当然訳せるはずはありません。そもそもまだ北方領土という単語を知りませんでした。創立者がひとしきり語られた後、申し訳ない気持ちで素直に、「そういうのはまだ訳せません」と白状しました。その時、「先生のおっしゃるとおりだと思います」とこのロシアのお客様は流暢な日本語で応じられたのです。実は日本語の上手な方で、その日はそもそも通訳は不要だったのですね。私は、なんだ、そうだったのかと。その後は、出されたケーキと紅茶をちゃっかり頂いて、創立者を横からサポートするつもりで終

始ニコニコと頷き続けました。無事に会見が終わり、お別れするときに、創立者が振り向かれて、「しっかり勉強するんだよ」とおっしゃいました。このようなエピソードは、実は私だけではなく、当時、様々な機会に創立者は大学にいらっしゃって、そして海外の要人・お客様を大学に迎えるときには、必ずといって良いほどその場に学生を呼んでくださったのです。そして、機会があれば、通訳できる人はいるか、と訪ねられて、通訳するように、と声をかけてくださる事も何回もあったようです。そのようにして、創立者はご自身の大切な国際交流の場面に学生を参加させてくださり、貴重な成長の機会をくださったと思います。学生が表に立つという精神はこのような中で自然に創価大学に定着したように思います。随分後のことになりますが、たしかモスクワ大学が創立 250 年を迎えた時だったと思いますが、世界から各大学が招待されて、日本からも創価大学を含む幾つかの大学が参加していました。創価大学はこのときのレセプションや一連の行事に、自分の留学生も連れて行きました。そのような大学は他にはなかったのでしょうか。学生を大学の代表として連れて出るという姿勢が印象深かったのか、モスクワ大学の総長がひどく感心されていました。

さてここで創価大学出身のロシア語通訳のことに一言触れさせてください。創価大学にはロシア語学科はありません。外国語学科ロシア語専攻が開設された時期もありましたが、今は、それも形態をかえたかと伺っています。一方、国内にはロシア文学、ロシア語教育の伝統を持つ大学がいくつもあります。それらの大学と比較した場合、創価大学のロシア語教育は、ある意味、学生の自発と情熱に任されているところがあります。草創のわたしたちもしかりです。それにもかかわらず、この 40 年間で創価大学から多くのロシア関係のエキスパートが誕生しました。通訳に限らず、商社マン、外交官、大学教授、シンクタンクの研究員等です。創価大学出身者のロシア語の美しさはロシア大使館からも定評があり、所謂 A クラスの同時通訳も創価大学出身者がベースの半分、またはそれ以上を占める事も珍しくありません。

さて冒頭申し上げたように、創立者が初めてソ連に行かれた時、私は高校 3 年生でした。先生はこの第 1 次訪ソの折、『静かなドン』という作品を書いたノーベル賞作家ショールホフさんと会見されました。ずっと後になって、その時の事を回想されながら、創立者は、ふと、「あのときはどうしていなかったの」と私にきかれました。私は「すいません、まだ高校生でした」と。「あ、そっか」と創立者は苦笑い。創立者の初訪ソにギリギリ間に合わなかったわたしたち 5 期生です。

この 40 年間、創立者は、ソ連からの様々なお客様と会われました。創立者はロシアとの友情を長い年月をかけて大切に暖め続けてきました。その友情のどの一コマも人間的で感動に溢れていました。私が通訳をさせていただくようになってからも、会見の席で何人のご友人が涙ぐまれ、創立者を抱きしめて感謝された事か。訪ねてこられる方々は千差万別でした。気質もお立場も考え方も、1 つのソ連と言っても、本当に人それぞれで、一概にソ連人だから同じというふうには

言えないものがありました。非常に文学的、哲学的で、人間的にも深いものを湛えているなあと、これが共産主義の中で育ってきた人かと思わせるような素晴らしい人格の方もいましたし、がっかりするような、肩書きが背広になったような人もいました。ただ、毎回思ったのは、相手がどうであろうと、創立者が注がれる眼差しは変わらないのです。同じように大事にし、暖かく抱きかかえられる創立者。ロシアの人は大きくて、腕がまわらないとクレーム（！）された事もありましたが。

創立者は、1974年に初めてロシアの大地を踏んで以来、1991年の崩壊までのソ連の最後の時代を、そして崩壊後誕生した新しいロシアの混乱期を、変わらぬ信念と友情でロシアを見守られ続けました。北の大国が歴史の波濤に碎かれた時、誰よりも強くその未来を信じて、励まされるのでした。1994年、モスクワ市主催で創立者の写真展が行われ、創立者は六度目のロシア訪問をされました。政権はゴルバチョフからエリツィンに代わり、新生ロシアでは、権力構造が総入れ替えになっていました。それまでのソ連時代の創立者のご友人は皆ポストを失い、現役を去り、大学の一教授にとどまるか、年金生活になった人もいました。そのような中、写真展のオープニングレセプションに誰を招待するかが問題になりました。ロシア側としては当然新しい指導部の名前を出してきました。一方、創立者側としては、古いご友人も是非ともご招待したいという意向を伝えました。その意向が反映されて、現役を退いたソ連時代のご友人たちもレセプション会場にお見えになりました。

ロシアの歴史では平和裏に権力交代が行われるのは稀だったと思います。そのせいか、権力の座を失った人々に光が当たる事はロシアではあまりありません。ソビエトの政権が出来た時も、そしてソビエトが崩壊した時も同じだったように思います。その中であって創立者は、この二つの時代に生きる全ての人たちを、立場に関係なく、権力を持つと持たないに関係なく、自分の友人として平等に大切にされようと思いました。レセプションの会場に向かう途中、創立者は私に、「今日は友情のことを話すからね」とおっしゃいました。「人間が永遠に残せるものは果たして何か。どんなに堅固な建物も橋も国家もいつか請われてしまう。私にとって、その永遠なるものは友情です。ソ連時代に私をこの国に迎え入れてくれた方々は深い教養と高い人格の人たちでした。私はその方々との友情を生涯大切にしていきたい」という内容だったと記憶しています。しんとした会場に創立者の温かい声が流れ、スピーチを聴いていた創立者の古き友人たちの顔が輝きだすのがわかりました。そればかりでなく、新生ロシアの政権についた若い人たちも、同様に感動の面持ちでした。

私は、通訳という仕事柄、社会や組織の様々な場面に遭遇します。その中でしばしば目にしたのは、多くの関係が大臣とか社長といった役職のつながりであって、一時的に友人のように見えても、役職から離れたとたんにもう他人に戻ってしまうと言う事でした。役目が終わってしまえば、ファイルが入れ替わって、その後に友情が残る事は稀です。その中であって、創立者が築いてこられた友情は立場とは関係なくずっと続いていきます。一見当たり前のようなこの単純な事

実に思い至って、私は何回も何回も考えさせられました。

創立者のスピーチの後、会場はにわかに和やいだようでした。それまで水と油のようによそよそしかった新旧の人たちでしたが、急に息子が父親のように年を重ねた先輩を案内する姿もありました。後ろの方で遠慮がちにしてた懐かしいご友人の方々を、こちらにどうぞと、創立者の所に案内してくるのですでした。

創立者とミハイル・ゴルバチョフ氏との友情について少し触れさせてください。ゴルバチョフさんと創立者は、はじめから旧知の友のようでしたが、人生の波乱を超える度に会見を重ね、いつしか本当に旧知の友となられています。最初にクレムリンで会見をした時、ゴルバチョフさんは世界のヒーローでした。でもこのときの会見で既にゴルバチョフさんは壊れかかった大国を背負う指導者としての苦悩を創立者に語られました。その後、大統領職を追われ、誰もがこれで彼はおしまいだ思いました。おそらく誰よりもご本人がそう思われたのではないのでしょうか。その時に創立者はゴルバチョフに対し「あなたの人生の本番は、まさにこれからです」という力強い励ましのメッセージを送られました。そして、「身边が少し落ち着いたら、二十一世紀、二十二世紀の未来の人類のために是非とも対談をしましょう」と。この対談は日本、ドイツ、イタリア、フランスで先行出版され、その後に本家本元のロシアで出版される事になりました。ただ、ロシア国内の反ゴルバチョフ・キャンペーンは激しく、いつのまにか誰もが「ゴルバチョフがこの国を駄目にした」という雰囲気迎合していた頃でした。そんな最中、ゴルバチョフ対談を出版するのはどうしたものかと、正直私は心配でした。でも、創立者はロシア語版のために「ロシアの読者へ」という前書きを書き下ろされ、その中で、「ミハイル・ゴルバチョフは、私の親友です」と書かれました。ああ、これがわたしたちの創立者なんだ、誰が何と言おうと、創立者が貫こうと思っている道は一本だし、それは何があっても変わらないのだと、そう深く思いながら翻訳させていただいたのを覚えています。

対談後数年した頃、ゴルバチョフさんは周囲に請われて再び大統領選挙に出馬しました。でも結果は惨敗でした。その傷も癒えない中、来日され、大阪で創立者と再会しました。創立者はゴルバチョフさんを迎え、肩を抱かれて、じっと目を見つめ、「心の優しいあなたには、民衆をいじめる権力は似合わない、だから、あなたは、権力を長く持っていることは出来なかった。それでいいのです」とおっしゃいました。創立者を見つめ返したゴルバチョフさんの目には涙を浮かんでいました。

対話に望むとき、創立者は決まって相手の方のご専門、故郷やご両親のことを話題にされます。相手の土俵に上ろうと努力される謙虚なお姿が印象的でした。セレブロフさんという宇宙遊泳の合計時間でギネスブックにのった宇宙飛行士に会われたときは、学園生からの質問です……と前置いて、でもご自身の興味を隠そうともせず、「宇宙ににおいてはありますか、音はありますか、風はあるのですか」と問いかけられました。夢溢れる質問のはずでしたが、セレブロフさんの回

答は極めて現実的で、宇宙遊泳するときは「スカファンドラ（宇宙服）を着ているから、においては自分の汗しかわからない、音はスカファンドラのモーターの音しかわからなかった」と。ちょっとがっかりした先生は、なるほどと一往領きながらも、「じゃあ、人間は宇宙のどこまで飛んで行けますか」とたたみ掛けました。「池田さん、あなたはロマンチストですね」と返すセレブロフさん。「どこまででも飛んでいくのはいけるけれども、地球に戻れなくなっちゃうので、そんなに遠くまで行きたくない」とまじめに答えました。こんな会話の中でセレブロフさんは、すっかり創立者と意気投合し、理屈抜きで創立者を大好きになって帰りました。その後二人の対談が始まり、創立者が「病める地球を救うために世界の人々がもっと宇宙飛行士の声に耳を傾けるべきです」とおっしゃると、正直なセレブロフさんは「そういつてくれるのは池田さん、あなただけです。みんな、目の前の経済の動向ばかり気になって、先日も国際会議で発言したけど、自分の話なんか興味がないようだ」としょんぼり吐露するのです。創立者は、「宇宙飛行士の数は、ノーベル賞受賞者の数よりずっと少ない。人類にとってかけがえのない貴重な宝の存在です。この対談を通して、世界に語り残していきましょう」と励まされました。こうして編まれたセレブロフ対談の前書きでは、セレブロフさんは「池田博士は人類の宝です。この対談にある事は全て真実です。宇宙飛行士は嘘をいいません」と綴られたのでした。

もうひとつ、エピソードをお話しさせてください。ソ連時代にモスクワ大学の総長をされたログノフ博士という物理学者がおられます。創立者とほぼ同年代の方です。お二人が出会った頃、ログノフさんは生粋の唯物論者、おまけに物理学者ですので、宗教には一番無縁な方だったと思います。創立者の思想・哲学に関してもあまり分かっておられませんでした。ただ、創立者の個人的な魅力に魅せられて、ログノフさんは、「私は宗教をしている人を尊敬します」とよくおっしゃっていました。でも、私はその言葉の真意はどこにあったのでしょうか。創立者は「どうもありがとう」とおっしゃりつつ、二人の対話は常に物理学か大学教育の話に終始しました。いつも創立者が質問を用意されるのです。対談が回を重ねていくうちに、多分ログノフさんもきまり悪く思ったのでしょうか、「今回は私に質問させてください」とおっしゃったことがあります。元モスクワ大学総長の創立者への初めての質問はなんと、「最近、わが国に超能力を持った男の子が生まれて、そういう子がロシアに生まれたというのは、どういう意味があるのでしょうか。ロシアの未来を暗示するものではないかと盛んに皆が取りざたしています。池田先生は、どう思われますか」というものでした。ログノフさんは、創立者のことを個人的にものすごく好きで友人でいる事を誇りにしていましたが、彼の中ではどこか、自分は科学の人、理性の人、つまり証明されないことは信じない人間であるが、創立者は宗教の人、情緒の人、どちらかという迷信的な分野に強い人と、漠然と思っていらしかったと思うのです。おかしいですけど、そんな感じだったのでは。この質問に対して、創立者は、概ね次のように答えられました。人間として生まれてくる命には、人間らしく生きていくために備わってくる機能がありますと。その機能が一部開かれないで生まれてくる人を、成熟した社会は、障害者と認めて、その人が人間らしく生

きられるように、社会のあり方を整えようとしています。一方、人間には必要の無い機能が稀に開かれて生まれてしまう場合もある。これをほとんどの社会は超能力というふうに認識するけれども、本来はこれも人間らしく生きていくためには障害を負っていると言えるのです。残念なことに、そのような障害が深い時には短命である場合が多い。ただ、どんなに障害があっても、ひとつの命として、人の命の重さ、尊さは変わらない。だから、その男の子がもしかしたら短いかもしれない幼い人生を出来るだけ人間らしく生きられるように環境を整えてあげ、無為に騒ぎたてないで、静かに見守ってあげるべきです、と。この回答を聴いて、ログノフさんの中で何かが変わったように思います。何気に思い込んでいた宗教への先入観が覆されたのでしょうか。この時以来、ログノフさんは、真面目に、仏教の人間観、生死観、宇宙観を池田先生に質問するようになりました。それが、集大成したのが『科学と宗教』という本なのですが、この中で、当初2人の意見が合わなかったことが一つありました。それは、生命は永遠か、それとも、死によって全てが無に帰すか、ということです。さすがにログノフさんは、科学者ですし、物理学者ですので、仏教で説く三世の生命観、すなわち生と死は昼と夜のように繰り返す、生命のエネルギーはずっと続く、と言われても、首を縦に振る事は出来ませんでした。博士は、人間の価値はその人が残した業績の中に生き続けるが、死んだら土塊に戻るというお立場でした。このログノフさんに対して創立者は何とおっしゃったかと思いますか。創立者は、「死後の事は誰も確認した人はいない訳だから、どっちでも良いのです」と(!)。私は、こういうお言葉に本当にお人柄を感じます。創立者が大切にされるのは、観念論の上でどうこうではなく、生きた目の前の人間です。それに尽きています。いつでも、どんな場合でもそうでした。「どっちを信じて、それを信じることでその人がより強く生きられることが何よりも大事です。どっちでも良い。要は生きている人間がより良く生きていく事がすべてです」というのが創立者の着地点でした。ログノフさんは、大いに納得し、問題は一件落着となりました。創大生の皆さん、将来、様々な友人との対話の中で、なにか大きな見解の違いでぶつかり合ってしまった時は、どうか創立者の大らかさを思い出していただきたいと思います。大事なのは「人間」である、と。

しばらく後に、ログノフさんのご長男が、若くして癌に侵され、ほどなくして亡くなられてしまいました。創立者はモスクワで傷心のログノフさんと再会されます。レセプションの人ごみの中を縫うようにしてログノフさんを見つけ、大きな会場の隅っこにそっと腰掛けた創立者は、「ログノフさん。あなたの悲しみは、誰よりも私が分かります、私も息子を亡くしました」と言われました。そして、「今、あなたのご子息の命は、大宇宙に溶け込んで、そして、父であるあなたの胸の中で生きています、そして必ず、すぐまたそばに生まれてくる。だから父であるあなたが、ご子息の分も強く生きてください」と、ログノフさんの胸にそっと手を当てられました。対談の時にはあんなに死で全てが終わるとおっしゃっていたログノフ博士でした。でも、この先生の言葉に、「私はあなたのその言葉をそのまま信じます。ありがとう」と言って涙を流されました。科学の言葉では癒す事の出来ない人間の心がそこにはありました。そして人間の苦しみを癒し救おうとされる仏法者としてのお心がありました。時折モスクワのご自宅にログノフ博士を

訪ねさせて頂くたび、またお電話でお嬢さんと交流するたびに、ログノフ博士は「池田は元気か。自分たちはかけがえのない友人だ。また会いたい。自分は池田に出会えて本当に幸せだった」、と心情を語って下さいます。

さて、もう時間も終わりに近づきましたので、私の話はこの辺で終わらせていただきます。残りの時間、もし皆さんからご質問があれば、どんなことでもお尋ねください。

〈質問〉

・4年生（創価大学41期）

「通訳をされるときに、これだけは持っていかなければならないと意識しているものはありますか。」

持ち物に関して言うと、忘れ物が得意な私としては、ペンを忘れちゃいけない。それでも二回くらい忘れて、行った先で「すみません、ペン貸してください。」と言って恥ずかしい思いをしたことがあります。ペンとノートはとりあえず必須です。通訳が何故メモをとるかですが、文脈そのものは意外にメモ無しで記憶に出来ます。ところが、脈絡のない固有名詞が羅列されると、例えば「りんごと梨と柿とキウイと何とかと…」と、または国の名前もおなじですが、これはメモ取らないと覚えられません。数字も同様です。

もうちょっと真面目に答えますと、通訳のあるべき姿や訳し方は場面によって大きく違います。たとえば外交の場面では、発言にない単語を不用意に説明のつもりで付け加えるのは厳に慎まなければなりません。また通訳の存在自体が目立たないことが大事です。一方、交渉の通訳においては、通訳の語調が大きくなり行きを左右しますので、交渉する人の気持ちを汲んで、喜怒哀楽をしっかりと訳す必要がありますし、意図がしっかりと伝わるように、説得力をもって訳す事が大事です。つまり言語・文化を乗り越えるという積極的な役割を通訳が担う事になります。どちらの場合にも、形はちがっても、言語の違いだけでなく、言語・文化の違いをしっかりと知る必要があります。その意味で、直接の持ち物ではありませんが、国際社会に出た時には、諸外国との対比に置いて日本文化をしっかりと知っている事、そして何よりもどんな人をも理解し包容できる人格をもっていることが大事だと感じています。

・2年生（創価大学43期）

「SGI公認通訳をなされていて、通訳をやって良かったという経験・お話はありますか。」

振り返って見て、良かったと思うことは、たくさんあります。同時に、力不足を痛感して、申し訳ないと思った事もたくさんありました。まだ若かった頃に、創立者がロシアの文学者アイトマートフさんと会見される事になりました。私にはそんな大切な会見の通訳は務まらないと思い、心から誰かと変わってほしいと願ったものです。その願いも届かず、結局、アイトマートフ全集

を全部読み切って会見に臨みました。とっても恐かったです。駆け出しの通訳だった頃、創立者のおっしゃっている事を理解できなくて、わざわざ説明をしてもらったり、迷訳をして、創立者に笑われたり、ずいぶんと御不便やご迷惑をおかけしたのではないかと思います。帰り道はしょんぼりして、「先生ごめんなさい、次回はもっと上手になります」という思いだった事を今は懐かしく思い出します。それでも創立者に励まされて、一回一回をこなすうち、気がつけば、どんなテーマも訳せる会議同時通訳の自分になっていました。今は、蓄えた力のすべてを使って、創立者のご著作の翻訳に全力で取り組んでします。ロシア哲学界に創立者の思想を残していきたいと決意しています。

ご質問に戻りますね。通訳してよかったと思うのは、創大生として現実の社会で証を示せたことです。通訳は上手に訳して差し上げると、想像以上に感謝される職業のようです。おかげさまで、その感謝がそのまま創価大学の評価に繋がっています。社会にあって、文系・理系を問わず会議や交渉の通訳をしますが、ロシア語は珍しいからか、いつも「お上手ですね。どこで勉強したんですか」「やっぱり外語大ですか」って聞かれます。「いいえ、創価大学です」とお答えする瞬間が一番嬉しいです。あるときは経団連の代表团についてモスクワに行く際、成田空港のVIP ルームに集合しました。地下鉄サリン事件後間もない頃でしたが、母校を聞かれていつものように「創価大学です」と申し上げたら、一座はしらけた雰囲気になってしまいました。それでも、モスクワで皆さんの発言をしっかりと訳してさしあげた翌日の朝食では入れ替わり立ち代わり私にお声をかけてくださり、「八王子は良いところですね」から始まって、しきりと創価大学を誉めてくださいました。創立者にほんの少し恩返しを出来たような、そんな一番嬉しい至福の時です。母校を宣揚したいという気持ちは、通訳など職業に関係なく、様々な立場で社会で頑張っている卒業生にとっての共通の熱い想いです。